

京都府亀岡市のアユモドキとその生息環境を確実に保全すべき理由



©Kazumi Hosoya

アユモドキ

コイ目アユモドキ科 学名: *Parabotia curtus*

- 全長 15cm 程度に成長。ドジョウの仲間としては体が平たく、幼魚の体表には特徴的な縞模様が見られる。成魚は底生のトビケラやユスリカの幼虫などを食べる。
- 河川中下流や水路に生息し、遮蔽物が多く砂礫や岩場のある砂泥底の環境を好む。
- 6~9月に河川の増水などによりできる一時的水域(いわゆる氾濫原)に進入し、繁殖行動を行うことを不可欠とする。氾濫原は水田により代替され、今日に至る。

1. 絶滅寸前の日本固有種であり、その生息地は今日国内でたった3カ所に

アユモドキは西日本の河川に生息する国内では1科1属1種の日本固有の淡水魚です。かつては琵琶湖・淀川水系と山陽地方の数河川に分布しましたが、現在は京都府の桂川水系、岡山県の旭川水系、同吉井川水系の3カ所でしか確認できなくなっています。もともと不連続な分布様式をもち、地域が違えばまったく別の生物集団であるため、他地域からの移植で増殖を図ることはできません。アユモドキは今日の日本で最も絶滅が心配されている生き物のひとつです。



2. 国や県の法律や条例で保護すべき種に位置づけられ、保護増殖事業計画も継続中

アユモドキは以下の法律や条例により保護が必要な種に指定されています。

- 国の天然記念物(文化財保護法) 昭和52年(1977年)に指定。
- 国内希少野生動植物種(絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律, 略称:種の保存法) 平成16年(2004年)に指定。
- 絶滅危惧IA類(環境省第4次レッドリスト) 平成24年(2012年)に指定。
※IA類は最も絶滅のおそれ大きいとされる生物種
- 指定希少野生生物(京都府絶滅のおそれのある野生生物の保全に関する条例) 平成20年(2008年)に指定。

さらに平成16年(2004年),文部科学省・農林水産省・国土交通省・環境省の4省により「アユモドキ保護増殖事業計画」が策定され,計画は2015年に一部修正され,現在も継続中です。アユモドキはまさに緊急に保護すべき生物種として位置づけられています。

3. その保全の動向は海外からも注視されている

国際自然保護連合(IUCN)が世界でおよそ9万種の生き物の状況を評価したIUCNレッドデータリストにおいても,2015年,アユモドキは最も絶滅のおそれの高いCR(Critically Endangered,深刻な危機)に分類され,その保全の動向は国際的にも注目されています。

4. 京都スタジアムは完成・開業したが,亀岡市のアユモドキとその生息環境の保全計画はまだ十分とは言えない

京都府桂川水系のアユモドキ生息地でも,唯一確認されている繁殖場所が亀岡市にあります。これは桂川(同地では「保津川」と呼ばれる)の支流にあり,水田に水を灌漑するためのラバーダムが上がることで川の水位が上昇して出現する一時的水域です。アユモドキはそうした一時的水域でなければ繁殖することができません。この繁殖場所と初期の成育場所である水田域が京都スタジアム(現在の名称/サンガスタジアム by KYOCERA)の建設予定地に含まれ,市民や生物系学会,環境保全系市民団体などによる反対運動が起きました。京都府と亀岡市は,専門家会議の提言などを容れて建設予定地を駅北側の住宅・商業開発区域内に変更し,スタジアムは2020年2月に開業しています。

しかし,スタジアムによる影響が未知である上,当初の予定地に計画されたアユモドキ保全の中心となるべき公園(現在の名称/京都・亀岡保津川公園)の設計やアユモドキ保全計画はなお不十分であり,亀岡市のアユモドキの絶滅に対する危惧は解消されていません。

5. アユモドキだけでなく貴重な生態系,自然と共生する社会,希少な里山景観を保全し,世界的に稀有な先駆事例として地域に利するものとしてほしい

アユモドキは自然と共生する社会の象徴です。近畿地方に唯一残るアユモドキ生息地である京都府亀岡市周辺の水田地帯は,湿性植物の多様性が高く,棚田の石垣など伝統的な里山景観を有することから,ラムサール条約の潜在登録候補地に選定されています。ここには在来の淡水魚類が35種以上も生息する貴重な淡水生態系が残されています。

亀岡市では平成15年(2003年)より行政と市民が協働してアユモドキ生息地の保全に取り組んで来られました。また,ラバーダムの管理を含む繁殖場所の保全には農家も貢献して来られました。まさに,自然と共生する社会を維持して来られたのです。

スタジアム建設場所の変更により破壊を免れたものの,今なお消滅の危機にあるのは,アユモドキ生息地だけでなく,この貴重な生態系であり,自然と共生する社会であり,それらが生み出す独特の里山景観です。この有機的なつながりを保持していくには,アユモドキ繁殖場所周辺だけでなく,水田と河川が連結するより広大なエリアの保全が不可欠です。必要なエリアの保全と共生に成功することができれば,東アジア温帯モンスーン水田生態系保全の先駆にして世界的に稀有な事例となり,地域にも利するのではないかと私たちは考えます。